盛衰通紀

十九

戰記

姫

共冊三

内閣文庫
和書
三四七〇九
類
號
三三
冊
一五一
函
七
架
(三十方)

内閣文庫
番號 和 34709
冊數 33 (13)
函號 151 60

国立公文書館
National Archives of Japan

周
285

盛義通記卷第十九

同源

謙作断男色女之付坂中祥條條、謙作事

秋月文種類遊付時明勧修重雅御法之事

高橋殺逆付源義討死并妻搬送事

毛利元就上洛之事

常春岳搬送事

宗作大三司合戦付同不参上并頃代祥繁之事

大友晴門司搬費付毛利元就上洛之事

毛利晴廉討付大友晴英之事

法印玉馬京兆之事

東國西宮合戰和平勅使付毛利隆元毒殺
并白鹿城陥落事
大友宗麟訴状付雲州浮沢軍事
并山中鹿之助武勇事
武州松山城責付竹束仕寄并味利方勝ル事
謙信松山陥落付山松城没落事
泉州堺付畠山方敗北事
并河内直轄滝死付島方氏滅事
信長東海使者上京付細川藤孝没落事
信長西宮後向付足利義昭合戦事
今川氏真信濃侵略付奥山帰京亮没事

氏真ノ5　家康ノ三州軍付氏真没落
并氏真ノ方諸城落事
三州一向宗乱付徳川勢ノ手一揆事
徳川勢ノ分散味方付山岡伯耆太郎ノ城落事
三州吉田城軍付佐野一揆合戦事
三州大浜城軍付針崎砦合戦事
武田信虎ノ会盟ノ為駿河ノ岩殿城事
信玄事

信玄諸国上州軍城付小幡重定不易書
并信濃宋弘ノ事
長篠業正卒去付信玄責落上州箕輪事

盛衰通紀巻第十九

諫信卿男女之身却中祓保雄諫信事

色欲の人をそこなふる古今いくそばくぞ上杉輝虎入道諫信は女色を断て武道の時うつり品ひ付て古今の名将歟如此ある事を失ふる多しと雖て一生不犯の殊を記す男色も亦然りとて一生淫乱を犯さゞる頃中の祓保雄名は諫信の譜下にありて口惜かるゝ書せり〻所皆信也（門亟）諫信とえらんと所々信長既て歳暮の手紙を毎人（遣）ゝ仍ていろく譜を為て諫信第て如犯之樹出るより世よりはたあるゆゑ〻より薬をえんとの毒薬の由を以て生〻ゝとて推名祓保雄もよ少幸を得和しよりて氏雄宮田信人

小弓殿の御子に好浪人ありけるを左馬頭十位
衆双なき兵者と祖保西親を召具し給へ（あつく恩賞
して使ふる事あり）年来の恩を祖保ひそかに左馬頭に密告し
て汝が主人（行て浪人と指南し）鎌倉を仕て何とぞ鎌倉を
殺害して名を汝に又の御恩に作せ（ばて一国の大名せん）と
説文を与へ（ければ左馬頭）何ぞ新参よりかくんや是をの
恩賞なし（給へ）とてうくらけ合祖保三年の十二月鎌倉（
なき書山の名をよたいをいしりたるも縁も命し）仍て柿崎の
名を長尾の猪ちよ居てうくよ御年十一月を左の如き祖保
永禄四年六月右馬鎌倉（出ることを左馬頭能
使并とおひて一度をもくあて鎌倉の屋敷に焼き沈状

を送出す刑鎌倉殺人して左の屋の中に焼死しよる事
左馬頭又は西親之を知三郎兵衛尉（賞ら）人（と）
し能光寺よ猿屋の中をもて（鎌倉）鎌倉殺人二人
斗よりて御よ西親の（鎌倉）鎌倉殺人左馬頭（と）
河面寺ちよ新参ら相撲（海）ありて寺よ其糟柿崎寺を左て
今日石ちよ西親の出を（ら）我を不作いる程細
（一）寺出寺よく出（一）又尚寺の者とも上中下のきらひなく
又知るもの（ら）や此味を（一）とりさて三人の常左馬頭
逢て弱ねしよ寺出の殺出て能光寺よりいき又病死したる
方なく尚永代武威を永ひ出寺の（一）中を三人の
去ともかくてやれ鎌倉殺人は能光寺よ作をとは不審

城中の惟名神保小八郎をこのむ藤四郎小人あるをい
うてかく（さふんなるくせ）城海（朱りなる面）の御しるしとして
御方の用者あるんひそうよくつくん知さるものありや注申せよ
と有しよりまた川海あり市市よ村上三郎といふものあり知さうと
申ば三年ゑ城中よりてくるとき時ふい十三匹とえてかひき
三郎兵衛派人うる来ものをいふものをしをしてたそ
しらいかるあれよ彼家を派人せしや巨細を存知と申ば彼使
て云ハくそ公をるるあり神保惟名い承諾下よ有ふ
ふ信出（家臣）ゆ海ものしそ出あり海ものしそ公海人よ出
うう城中信人石島小三郎よえせ申ものよ見も又ものをいい
知ものを派人のうけい不知と申やうて云へて左衛門を捕

同ものも初のうたの外ハ海ものを捕同のうよ死さう死
ふいを陸ものよ古袋ありうとくをさうえれい神保ものを袋
文の物ありうてよて神保ものを御とい知さうの危うしるたと

秋月文雅逗留付時の初御方雅術法之事

毛利元就ハ九州を攻ふんとそ先大友の家人温湯（スヤウ）ヒロ
ものを攻ふんとて出門出先出門
又同御を元よきしハうあ陸ものをあせけも大歌あれいうの
ハひそうよ御をのうれて大友宗麟ハ戸次
伯耆守橋道連入乃道雪を大将として臼杵城中警護之為
左と田原右京亮をそへて百ものの人出先陸
おそ氏中島川ハ文同御一人者うしう部ものとゆて毛

も立花家へ出張せし戸次道雪ハ斥候を出し吉川小早川か人数
立花へ取かゝると聞三万人と号しけれハ道雪使を立出し
陣中を志つめ令しけれハ小早川よせかけしかハ是よりいくさ
初り双方入みたれ稽古手に功ありしか吉川ハ能戦ひ小早川ハ
おもひのまゝに戦ひしかあへなく切崩されて舟にのり芸州海
路より帰り道雪ハ名将のちからを治めけれハ道雪か軍にあらん人に手を
交へひ感しける元就ハ今度の敗軍に懲て筑前の住人秋
月文種筑紫惟門息原ハ日比子を恨せし族人と共に毛利
へ一味しぬへしといふたる欲にハ兵を起しやまく三人共書て評議し
宗麟ハ是をや知るにつかれてより本心あらし家老ともしらく
右ハ毛利へ一味して一度の意を放へしといへとも公世乃り大友

依之戸次道雪を以て種実を向ハしむ秋月力尽て自害
自害しけれハ次男種実筑紫惟門同庶共も城に籠り居けるを大友
出しけれハ大友より又種実を筑紫に出岩屋城に拠りて
柳秋月ハ孫観の時大友か病卒のまゝに有て時節を待俗称
ハ本しと共評議しけりかくいひけるハ古へ花山院の御時に安部晴明
赤は晴明といふものありてこれ天文加茂保憲といふ博士のもとに通て
天文を学ひ更に蘆屋道満を捉へある日晴明大和出立へ参り
しに今日此門へ何者しきもの入へし謹むへしと申によりて此門を
閉て客を禁しぬ晡時にて和州の城紀より礼を兼し
たり時に晴明其に大鷲を雉俗称し皆一疋に何晴明かいはく
此の中に毒虫ありと云へといふ俗称多くの此の

イ雉

中うかの毒虫をいのり出せば一ツの虫をとる時は大蟹生雅
神中より討を出しそれら虫の中の虫より討を（ト）心眼（こころ）
よりて討ーるるる虫の初くるる包より赤西別彼虫をとる
せて出らん何ゆえ果して眼より討あられる事中の毒蛇ありり
時ゆえ初祈の呪力を雅ゆ蟹天下ゆ出せりとや

元稽殺逆対弟　東海撰家事

永徳元年七月大友代の臣元稽殺逆対弟の兵立石氏の
軍も戦功あり又秋月より抜きくせる時も多ありそれ
豊後撰より軍勇有しかども豊後の地儀ゆ有を取て
毛利（元ー九）の先をせんと約せ又秋月ゆ自害の時次第
稚家浪人ーあ稽より有しを招よせ秋月（入て）独身い豊後の

撰あり豊後撰よい永人（を入）ゆりそそ筑前をきりふさ紀
ゆ元の付来を山ゆり大友ゆて戸次乃雪吉仏を紀杵城中に
七ゆ人をそ入て先豊後撰をせあり偏者入い元稽ゆ
家後撰（ゆるそ先陣い吉仏を）立中海日城れも家ゆ秋
月ゆ陣あ中ゆ（ーーい元をゆて家海を押（秋月）京
此時元稽より七百人（の）響年元稽ゆ豊後尾張ゆあ稽を
率ーゆ元稽表（出陣中）家ゆて七ゆ百人（一ゆ）如て高
表（出陣ーー）ーーゆ稽ゆ牧切る豊後尾張ゆ包ゆ討れ
ゆ稽ゆ尾張ゆ立ゆ中ゆ後ーー海中（近）入ゆ（動るゆ）の希
ゆりそれゆ乃雪ゆ下い中ゆ海（海ゆゆ）此時尾ゆ家人元稽
沈（ミトヤ）ゆ大張他浦ゆ元ゆ元人（同）ーて元ゆ百人毛利ゆ諸氏

[illegible]雲[illegible]郡人[illegible]雲[illegible]郡赤須の城を攻む郡人以下
五百人一人ものこらず[illegible]赤須の城落しぬ三人は軍を海
しけり

一　[illegible]雲岳城攻付[illegible]城之事

又同城は一さん大友方へ[illegible]れも[illegible]籠も入さる由
溫湯[illegible]も又同[illegible]て城を[illegible]又[illegible]
城は毛利の人数を入る海上は能島の海賊[illegible]
[illegible]の[illegible]九月二日[illegible]元能
小法[illegible]て又同[illegible]
[illegible]雪田[illegible]親実[illegible]中[illegible]稙実[illegible]八月二日
[illegible]を立て中津[illegible]陣して同月十日失[illegible]城[illegible]せて

攻[illegible]城[illegible]西[illegible]雅は[illegible]て[illegible]二百[illegible]
[illegible]は[illegible]毛利[illegible]出雲[illegible]郡[illegible]
山[illegible]城[illegible]郡[illegible]城
[illegible]郡[illegible]
いか[illegible]
[illegible]城[illegible]
[illegible]西は自ら出て力戦し威をふるひしかども城方たて
一[illegible]九月十日の事く（付[illegible]城討入地のにより せあ）
入[illegible]は[illegible]名論自性の……
[illegible]中の西[illegible]
日[illegible]九月十八日[illegible]
[illegible]城[illegible]は[illegible]惜[illegible]

宇佐大友同合戦付国衆焼[illegible]調伏祈[illegible]事

大友響の方より宇佐大宮司（先祖を改め大友と名ふ）自と
ハ大友の下知に従ひて軍役を勤めよといふもの大宮司
より宇佐三社の神ともハ先素盞嗚尊の御女にて田心姫（タゴリ）と申ハ
筑紫宗像大明神と潮満姫（タツキ）と申ハ宇佐大明神市杵姫（イチキ）と申
ハ安芸の厳島明神と此三神ハ皆百年の宗廟天照大神の
妃なるの尊の出神と今を去る四百年の昔宇佐より右三社をあら先
きりて宇佐三宮大明神と申奉る又宇佐地より宮仕申ハ
宮大神ハ應神天皇之をれより以来宮司ともに絶て課
役をあて来況軍役のさいそくを受ハきや系譜の代に到て
赤代の恥辱ハ一とふ様にあきらかにて大友
方受て宮司の命を蒙といへ共軍役を受まじと云ふ

毛利（ハ加賀守いそき殿）と云ふ人永禄元年九月六日
参ぶりの大宮司も為て用ふ社人伶人神官僧侶とも
急切奥宮ふさひ矢用ふとして世く家々の先陣然ハ
大友方毒系白杵高橋等立花人鉄砲ふを以て入ふりに大
宮司方の左氏ともあけちりて今ハ大宮司方も宮中へ
入ふと家々方より伺者ともを遣ふ年次をふけ一ハ杉氏麓風
ちきふよ以て宮社民屋自ふ一斤より元の所領力をふ
ふけふせふ大友方ハ宮ハ中庸へ入りふされハ大宮司
不神官ともうちふて係ふ大友調伏の法を行ひ三日三夜
いのりふるよ係る事ふ明神のふふ神ハ祟礼をふけ
元大友ふ立ふ家ふて神官等心狂如ふして神ふ呼ハ

記きり今後等大友を調伏せハ神又海等をあらさん神罰よひ
いきうん有り大友の人を亡しうん祇又氏方の人をも亡しうん
と神祇新しくハ大高明神下作天して調伏を申めうりう
撤し神罰の私あき社等うれ

大友響門司攻付毛利元就海陸事

大友響ハ大内田原紀実副ハよハ吉弘左衛を変かゝめる臼杵鑑速
ち想天ハ戸次伯耆ち左雪ちを大高光ハ共に長山の法師等
海を十日渡りて三方海人又同鑑を以ゝ仁保左陸介
三千人ハて豊後ハ長南豊前紀数長春せ豊を大友響天
の兵ハ上ハ人て門司の浦ハ上ひよせ大海絶数十艇打せ海上ハ
攻しハ門樽をうち破り撤を多くうるを氏毛利元就ハ出雲

海陸郡ハ上りて二三ケ所ハ上ハ上ハ番田の撤を攻長ハ上ハ番
春房撤大高同没房を以て原田をうこせ上ハ番ハ岩ひ響を
分て海ハ毛を多ハ長隆元隆兄弟の子代七人を兵一ケ
ハ上ハ番ハ上ハ同十三日吉田を立て第津の海部等にて響
をうハ上ハ海中の三村一ケハ上田石川海部の中兵多一ケ兵
他の兵ハ長宗猶海周防の高部伯耆の国条小鴨伊豫の河野
一ケハ平宗宇紀高西国ち海海の山門古会猶海小田刑部長
上原右地三好吉忠和知湯浅平賀小泉稲梨番原安芸乃
熊谷番門を長已賀を長三原板垣駿河氏本原祝保山孫小方
ちうの海屋大庭実左衛門賀雲乃尼子刑部国政毛利の一
ケ知海原口海響次等十方七千人ハ十月十七日毛利元就ハ出雲を立

て廿八日赤月（赤くなる）より出作人板垣三郎一そく八百人（四月
搦（如搦）として出羽の搦を力をはげまし出羽の搦
中より攻をとせて一二の如陣せあ搦つめの搦（せめ付）浮
浪の輩立方仕人（四方より打囲）んて元祖い出羽国に陣
しかう大友方ハ搦を分て搦を押（大搦の出羽浪の
搦と搦）と陣しかうこゝより田原右京亮ハ搦中（こゝより）板原
三郎ら浮軍の中より稲田浮正同義右京亮と為て知人之
しかハ十月十八日の暮方より稲田ら打ハ（西の尾口
外の尾口）夫勢を討入りう
稲田昌原足て元原二位方一所包囲（四日辰の刻より搦口
より）を立て出羽とせんとし（攻るなきれるハ潮やなく
稲田ら二位あ〳〵とれて七度三人（ばかりよりられ）板原もに
保も敵の謀を為て市て敵をあさむんとて四日辰の刻
を待うう

安藤西門同軍付仰沢院正行田津付原討死事

おのよハ出羽のお道ハ高〳〵ら〳〵の立を待ち〳〵四十九日辰
の刻搦中より立しかハ田原方人（西南より世あ
より七ヶ所紀荒の搦二百人（一ヶ所せあ）より毛利方に
大友ら浦の方をもて〳〵搦をせ知ものを見て出のひまをさしち
〳〵て出るを（乱入せ）て山川八郎人（赤旗三四五一ヶ所）
さういう〳〵の旗を出るめ五百騎ハ山陽山陰四国熊ら方騎
人ハ赤旗の九本紋よりて尼子ハ月ゆい三村ハ芙蓉の紋ハ杉原
ら三ヶ所より出せ〳〵て海上を陸地とあ大友ハ謀さうひ八

仁連ふ郡より毛利勢五千の兵、入て清よむらい軍せよと
てしたがへ、搦手板系道をかけ、田系勢ひて寄て攻入しかば
西尾丸はせめ破られ、板系は本陣へ火掛入られ、毛利勢
を防ぎて門前に向ふ、田系は西尾丸に伊勢、藤堂高虎に統正行田は
富塚に、川原に欲乃雲右衛門人にて新手の敵をあけ立しと門
前に一片に成て、酒宴にて無事なる、搦手の人数、浜の
ふくろ、塀のうらに搦手を切り戸の宝搦を自出
すむり、搦口板を抜し、柳谷にて搦をとりあ踏るかるる時、
柳谷ひらくと、一枚にて、多勢にて踏出
酒宴をとり、て、待うけ、山岩川宗右衛門、大友方も宮
人討死、山岩川は、ちり、て門前の南山より、あ内を先に

そ、ぬ、多勢人、ありしき山を上り、峯より旗をさし出、三下よ
ぎをうち、毛系勢見て、ひしく、あせく、あ、ふ、敵をうけ
られも、欲乃雲ちつもをとらうと、おほ左右、あらう、熟
して、鉄ふ、毛利勢、千ら、られ、又、あ、向ひ
伊勢作田は、勢も、山岩川を山より、ちさと、防しよ、山岩川も
あせき、ふ、ぬ、ぬ、欲、六百、多人、の、も、紙、陣、上り、ぬ
伊勢、作田は、力戦、られも、浦、敵、戦て、伊勢、討死、休
田は、山岩川、五、あ、られ、ら、大友方、田系、下、陣、我
ひしくも、大敵、あせき、ぬ、ぬ、ぬ、戸、次、左、伝、白、杵、笠、毛、利、大
勢と、千、五百、紀、て、戦ひ、三、千、多人、多、ら、れ、ら、毛、利、元、就、父子、
六百の甲山、上り、て、下、知、ら、ら

毛利勢夜討付大友勢敗北事

日既に暮るゝに及ぶ陣屋より出て安藝の兵ともゝ
軍に成るべきの由申ければ福屋城中大友加勢多
賀左京亮殿城中同治部少輔殿福屋城同治部宮内
少輔殿同治部少輔殿の仕人福原出
羽守殿と申て四郎刑部同右衛門尉殿三郎左衛門尉
樋口右衛門尉同民部丞殿同治部少輔殿の給分を被
三百人宛同小三郎殿同右衛門尉殿同治部少輔殿
宇喜田左衛門尉殿秋山隼人福原宮内少輔殿四郎左衛門尉
同治部少輔殿同右京亮殿同左衛門尉殿
七百人宛おのおの調(イ調)を加て日向紀伊の両陣に
夜も用心しけるとも毛の軍は佐れ波の如く陣屋二三ヶ
所に火をかけて攻入しかば日向紀伊殿大友勢
二手に成て毛利勢も五百騎宛にて戸次田原
左近白杵ホハ大勢の囲をきり抜くしかり破て一人も討死せず
先陣に入り相大友ハ生れ付て大勢の囲に成ても軍とい
へば軍わをさしかゝる士卒ハ武功もこつゝえさわて
四方へ四方へ散ぬ毛利勢ハ尚も追ふ者も多く軍もかくるゝ
程の軍にしかるも尚ハ事行あるべきかと評判しけり

法華寺の合戦事

毛尾京尉ハ軍津の宮を分て輝虎と号して黄色の
一小旗をなんとて小田原を出て武州ハ

御印信の料を献せし故賞として陸奥守に任ず
奥州の内四郡を賜はる所石川の出羽守高清
隆の子福原新中隆久の末裔なり中山杉山乙部
隆宗山岸の郷も為て本宗新中も隆宗仍て同国益田
全県入道多賀左京佐俊光隆も隆宗仍て出雲（せあ）
より尼子の族下三沢修理三刀谷大隅飽浦（アクラ）伊豆八毛利の族佐原
の郷人の末裔なりしも元弘大軍よりて
攻し所三沢三刀谷飽浦村井等京市宅熊肥牛尾
等皆亡び隆宗雲州源郡浅合（アライ）湯の郷を賜て日夜
鞭撻を怠らず元弘四年十月二日上京（江を）
して毛利大友の軍と江を上る又奥州今泉郷を葦名
盛氏より武功を仕て賜る大郡第一の
家也 郡内を給郷祐の八郎朝の末裔七郎祐光の
孫なり七郎より四代の孫祐房の苗裔 同国岩瀬郡阿賀川の郷
に八二階堂を和泉守祐能と号されしを奥州の押領使陸
奥国会津賀川の二階堂を仕て二階堂を為憲の為乱 又二
郡郷を二郡中右京亮義次津川の郷を以て葦名の族
なり郡内に葦名盛奥実子なるを以て下二階堂を祐能の
子を葦名に養子とし葦名平左衛門盛隆と名のる武勇隆
清にして大業国中を切従（威を）ふるひて上杉奥州数
代を石川左衛門時家より石川左衛門昭光
ふたの子を伊達左京亮輝宗とふ渠も威をふるひ国中

二ツ三ツにてとられ合戦止付而し此付永禄四年七月四日二本松
義継謀叛し葦名を討たんと諸家此をあつかわれて葦名二階
堂須賀川の城の主なる子人にてしよせ返しらんハ城中粮に詰りて近日
しかも葦名の中にて二本松を押付ふとは義継降参し候ハ中
引して二本松へ返し又石見よりあし家臣よく取りて石川
昭光同輝宗も盛隆へ使を厚くして葦名輝宗の子政宗と
いふ葦名盛隆にこ宛つて事のこと輝宗か子政宗か中月今年比呆
に取るを葦名か案内もせんとていろいろ謀りかく政ましけ
定まりけり

東国両国合戦和平勅使付毛利隆元毒殺并白鹿城降参之事

叛乱をしつめらるへしとて国々へ勅使をおさる東国へハ大納言清原
枝賢つかハされける上杉謙信ハ畏奉る由勅答申て奥州葦名石川
於も勅命に任せ候由申て安房上総下総常陸に到り里見左京
其外の佐竹も子細なく御請申て武田信玄ハ勅命を守る又輝虎
ハ久我亜相晴通并聖護院准后道増を下さるる毛利大友両陣ともに
旗旗を納ておのおの静謐に任せて統れとも青芸城ハ尼子義久の城なれハ
彼城を破却あるへし和平せんと申て然るに筑前の宗像麻生
秋月等ハ青芸の城をとられたれハ宗麟筑前へ攻入らんあつかひ上ハ
勅に従ひかねらん此いさ勅使へ先一ツ討んとひしめく由へ勅使も
中津に目をとられけり又尼子毛利ゟ両方へハ三宝院僧正義堯を下向
先も累年の鑓数在陣に不及日を送る中に尼子方の晴久
同年四月半に卒去して子息二郎四郎義久へ家督を譲く父晴久之

侍従の和泉又九郎（モロサト）を親しく召し寄せて酒宴して永禄
四年八月四日毛利隆元を毒殺せしも誰の毒殺せしと
いまだつまびらかならず隆元の幼息幸鶴丸を輝元と云て隆元の
父元就と共に出雲の尼子攻に白鹿城を攻て立陣したる尼子の
国人山中鹿之介幸盛と作したる侍従の侍人和泉の一族謀叛と聞
て奔て隆元九月和平して陣を退て帰る侍従
大せ申ひ退陣せんと云て尾の方へ出て紀州の方へ帰
りて有しとも有きこゆ和泉の家に紀伝文を入て
二位殿の中へ入り申しられい主殺れとして糧米能を
與へ二日の答意を作構しも隆元は和泉の城を出て八月四日
安芸国佐伯郡に帰りいまだ帰て係に辛しとて扨は和泉の毒殺

ゆえ人々不審し陣中騒を発て帷幕の中に多くを居申ことを
あらしる中に和泉の家人佐伯右馬丞中に糧米して敵国にあれ
ひとへに和泉の毒殺と云へ元就父子喪の中は軍はあるべ
からずと云へ元就父子喪中に和泉を攻よとていろいろ相和尼
より謀あれとして和泉をさしとき諸軍白鹿城を攻ようり
さいとて六月より五人の合城たを攻よせ白鹿城の蘭河の
尾谷を上下たた二月の穴を掘て城内より出て突て出
きあり穴を掘せりよりこれ双方あり合てしは一
番に毒別伯人福原長左衛門尉尼子方身日大郎と
戦ひ福原勝て身日が首を取て穴より卯（出つ）尼子方松田大
炊と毛利方侍従の家臣長谷と戦て引退く家毛

利方兵庫頭と尼子方山尾利兵部と池を会せり 伯耆安
藝の兵武田方と尼子方東川平六と池合せ 安藝安藝
の井上雅楽頭と尼子方湯原出雲守 宍戸 六番安藝武田
波多野兵部大輔といふものあり石見 池を会せ 七番尼子方村井
左馬助と安藝の三吉小三郎と宍戸八番安藝武田井上
後と石見武田佐々と宍戸 番安藝武田井上
九番毛利元就と吉川治部少輔 松田あり
入る尼子方小野寺三郎 成し合せる 猪口
備後の毛利新三郎と尼子方山口平次とつき合 新三郎を
つきふせ首をとる 宍戸の中にて十番の池合 社
毛利軍勢 三の
勝時しとやらひりん胄をぬいで降りられて元就四方にて一命を
助命一族八十三人 池合 流され
大友宗麟許状付雲孔 浦原軍兵 山中鹿介 武蔵守 幸
吉三の城破却のこと 宗像秋月 勅使 を初
とする 大友宗麟 一巻の許状を天文年 流 毛利
を征伐せんと 仍て秋月宗像方 吉三城破却の 大友
攻入られ 出陣 勅使上洛ふ
仍て吉三城破却小松 八月下旬 勅使上洛あり 九月一先
洛 雲孔 尼子 白鹿城を
され 松田義人 流され 尼子 の時と 辛 義久
うつ 先 吉原 山中鹿介 牛尾 伯耆 三沢

を能登殿と庫村村御中三万騎人目能登殿人刀不(トイシ)庫
御西三郎殿ハ加賀殿四郎泉四郎宗六国殿を奉て陸奥の国
宗を和田殿と申て平殿を川原殿伊勢国古志国備中国山
岳殿東殿東市正横殿を庫助殿井能登国西山道殿
今川能登殿和泉殿同子源三郎殿を源六郎殿伯耆国
永福六年八月十日二手よりて先陸尼子九郎殿伯耆
降矢より列伍一騎陸尼子伊豫殿を西久乙(ヨト)矢より馬渡殿へ
うち出さるゝ尼子方より元弘へ使を立て今日平僧の軍
より多年の生涯を変せんと申せ元弘も又ゝとて使
を立て元弘ハ高野殿より宗へ虎鞭より宗て引たんてら
れと下知して先陸吉川山吉川お完戸門殿ヲ下一万三千人
去ぬるとて其日組より多く渡人合場をとりくとる陸奥
出されて入こゝを戦ひしよあのとく吉川山吉川ハ中を完
て尼子どもをもむるされ尼子よも切ゆりく鞭ゆ出雲伯人
を来たる川原要伯三百人山吉川を攻をとりくんと申きひしく
戦ひ加よ山吉川を攻うけ尼子くゆせよより陸中ゝれ
てゝ近くゝ来川原きひしく近ゝけしよ播磨三郎殿長大元
三百騎人を合せて来川原を横合より入ゝ来も川原
も敵三郎殿自身切て懸しる来も川原も討死しゝを
入ゝれ戦ひ手の軍れとく自身鞭ひれ死ぬ乃ハ
山を奉せり八月十日赤の下列より軍ゝ日陸より面ゝ
ゆけも伯耆ハ人ゝゝりゝ付元弘三百騎よて雷電

のとく切て出る武陣尼子備後守陣に入れい元親と云て敵
陣へ入これ大内方へ敵ひしと時の運なやとりけん尼子勢
ものこと云て四方へさつと引あと尼子方三軍の富士山中庵前
八千騎二百騎を芝居に置て居て戦場を退て退散
毛利勢を七度まで追まくる所に自ら歌七騎の首を取て踏こる
毛利勢の兵付(トツツケ)盛付(モリツケ)攻る四方の塔ヶ所に七つの首を出い
付て大方の方へ引あと方を取のあ田を仕小幡山へ
引所に方有れいれを鬼神何を庵と命と分る
武州松山城攻付竹束仕寄の事 毛利元就の事
和使出数手まて西へ陣城拵へ
武田信玄いろ和合有と云
と八ヶ所に陣を出さりけること又冨家氏い小泉
の親族ゆへ小泉方に詰ないらかまいりけり武田信玄大
田三示(キヲシ)上杉善悪婦城を七郎業正五人(ハ)上杉方へ助の
方も有りけると大田八岩付を切て方近輝虎へ人を合せ小泉の
扶城武田松山の城へ上田安房守攻る又北条氏政示
よりとせるよ不とこの軍ゆへ安房守八歳のりう三示い
いとつきの和をもとめきて扱城へ出へきへをかんうあるよ和
笠氏憲政の末子小上杉方憲政といふ方に出お笠氏の
子あれ四男をそふものも有へ一族ら城の助あんとて
氏憲政を松山の城へ入て為小泉ようせもるあいうくちて
城を攻へくて虎の里入黄隆黄伝も輝虎一味あれ

あ藤よりて信玄と〳〵と諏訪
諏訪は城後〳〵三郎は江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ
あ而信玄ハ三郎ハ江戸中納言殿御
くんてきよりなくさんとて出る
を聞〳〵信玄〳〵加勢をたゝかて出
十二月廿三日松山〳〵をしまは
ゝるゝ所ゝ上田あ手ゝ社又上田
政方ゝ葉きし御〳〵山上さのこゝ
切腹屋敷のこゝ四方海面にて
三度上面ゝ家〳〵雑度あ海に屋敷又ゝくゝすりてゝ
きよりあ害せし御〳〵今度は
あるよ大面三郎寛之の方を
ハゝ家〳〵とハゝくさゝゝゝゝ

も或ハ火をせき流し或ハ糞尿を岸ゝ高く積み合掌
多くうち出さるゝ故堀るゝ事ハ武田家人甘利
左衛門尉信方同じく弟左衛門尉丹後四郎左衛門尉
西郷軍ニ行果を用ひし源氏ハ弓矢を捨て
ゝし今度も行果を用ひ仕寄を付て攻る者ゝ
すめを石の行藪を切りて行果を作りせあ
ふせく色を見て諸勢ハ行ものきゝ様相ましてうけ
合て行果ゝ仕寄を付てせめ寄る上城中牧もきびしく
源氏をうちけしに信玄の家人日向大和守嫡子長坂
被左衛門尉を召して城の内のものを皆切ふんと行果をなる
れて切り二人も討死しうち信玄大いにていさや

多くせめよせて鳥をもつかせてせめ寄ゝ三郎
方より諸信(信の誤か)を出ゝ武田ハ日向守切死
といふきゝ攻ゝ上ゝ弟左衛門尉丹後守嫡子長坂左衛門尉も日向と
同じく手ゝ源氏にて疵をうし(ろ)(手ぬぐ)ひ胴の中へ無入
ゝて疵腰に突刺ゝ及ひしに人ありて云ハ芦毛ゝの
糞をあつ立てのめい血ゝ事ぬ有ゝと云ふ長坂弟
命ゝ情ゝて武士ゝ畜生の糞をのんや討死ハ武の道
源氏ハ糞尿を出さんやゝいふを甘利左衛門尉討死
ゝ長坂弟ハ大ゝるのゝ多ゝ光源氏ゝ長坂ゝ武士ハ
命全ていく度も主の用ゝ社城の左右ゝ人ゝ
手ゝ方ゝ手負せハ君の恩ゝ源氏ゝ一生の名を惜て互ゝ

有りて不審とてあり毛利の軍兵をれまして某さてら
うんとて二口三口のうて一うんと風味ゆゑ吾〳〵とてなつ
く長沢殿上座しられて長沢殿を感して源をなし
て後用事ありとて立ちて此千代丸血ちりて氣を収く御療治し
られい申候しかり其利うたくぶき富士の名和之と世よ
ゆゑせうされい撫中ハ和泉も長て防戦の術をうしないし
信玄の石山御城を築品系謀かし一こく撫中へ編をもてあり
るハ此大勢なれともよく防きあり撫せきされとも
源信もいかく雪ふるく海信も撫くるし三系ハ江戸あれた
小鷲之指れ信のよい撫義へし書ようき自又せんくう
ハ的そのきく撫系あるハ此方ようハいくのはまといくれハ

撫を示ゆく同じくして大勢憑物へかくとかれハ憑物も富
氣強て和歌の指紙して撫を完しかれハ小系ハ撫をうけとり
四のてく上面安系秋をあめ到る憑物ハ撫を出て当代の士
十数人をして上見一院橋の撫義へ撫義へして源面のをくそうれる
有へして源面のをくそうれる

源信松山浪信ゆ山根撫浪義と事

源信ハ三系う告ようして海雪をちのき三月六日浪方の味方
を信しかれハ里見左面彼見勢一万五千人一院橋ゆ合会しる
上一時に日松山義撫しうとゆしうハ源信大ようう憑物と
以不見人ゆ撫を新帝へ社撫義あれ左面うあるあんと三
系をもおよせん帝とありかれハ左面ハ撫中人数を報知系

を潤沢にしてはへとも頼ぬ也人の所候しかるに是非なし され
とも某悪様此子息二人を人質に差置心なきるに付て
極め理なとて城中へ合せし井付ホ読る志め玉し目録条
を見せ人質を添て出しけれハ謙信披に見て是に至て悪様
か子息又五郎悪蔵十一才舎弟次郎三郎漸七才に成るを
二人か髪の毛をたのみにつかみて人中にひつさけ左手に刀を
抜て二人ともに下け切にして弓杖二丈計なけ捨てかけれハ
首をハ西のへて後謙信ハ三楽に申けるハかく大勢来り住し
るよそ悔れんもなきことなし 武田小条か勢ハいか程あるそと
問けれハ三楽申ハ敵ハ北条氏康父子并甥源氏武田父子なる
大人にも三万余騎といふ謙信大いに怒つて信玄と氏康

とハ大将もいふへしそれともハ謙信か先手の者共もなぬ
かれともこされハ大勢の敵なれハ謙信よけて通るへきを
捨て急き参りし信も信玄ハ弓矢立ての大将なれハ味方
の御自由なるまし近辺に小条か持城ハなきやといふ三楽
申ハ是より南に武蔵野にて騎馬庄山根城とやらん忍の城を
松田か守小田助三郎長宗こそれり本庄侍忠高木加賀とて
こそれりといふ謙信聞て夫より利根川二本木の渡しとて
大河有よしさきりつて舟橋をかけさせてへし松田か守孫
ハ自分のものにあひまて男女共にあて切りして一人も討ちて
居らしよとて太田を案内として八千余人を人と見る時よ
也尾謙忍俣よ衛門と称して一展橋をとゝまりれり三楽一人

先陣ハ赤松を渡シ法華堂ハ切て渡ス赤松の法華切てよて
つき流ハ山根へ向ひ引なを夜源信ハ一族七尾左衛門
高宗を拵て命を乞ひ一座の謀を能け武田小条ノ目を
疑を赤さんと謀り引高宗異て信玄の陣のおを思て
人をもむる時ハ山本を出さくよ切さき自害せよといふく
めて出ハ高宗謀のとく志のひやうよ武田ノ陣を取る
夜昼とあてそくんとて高宗彼方を守ふ切さき後切
てかくり則信玄中切さきる事をえせ二ヒ文弥
八源信より小条門ハ合山軍宗中小信玄を討んとの文
信玄ハ人て是を秘する故よ文ハ知人有ハ同七日ハ源信ハ
小条武田あ引ハ和田新系を使ふて源信今夜松山陣よ

向ひハ高雪原帰りハ不冨物といふ不覚人搬を渡そふ
源信を人を志ハ不一身の辱面有ハ有ハ有ハ
ハ大今日山根搬をせあ手ハあて切の志ハ宝て出郷
あんる戦場よて対面をハ志ハ有ハ有ハ
あく此原ハ対陣の意を拵せんと立るハ源信ハ使の
ふるをよふ八ノ原人利根川二本木の渡ハ打渡り小条
武田ノ面ハ有ハ陣ハ有ハ
面ハ山根搬押寄一日一夜せあふ搬を小田助三郎義
本戸信宗ハ子防ハ山本ハ取三郎ハ警ハ搬田ノ搬を源信
なるあんと思て西ハ郷せ原ハ搬人数ハ有ハ僅七十人
よ不意ハ所人百姓法師女児小三百四十人ハ有ハ

とも故の滅絶よりやすからん武士五十人くらい鎌倉勢八十人
尚毛家を始として同九日巳の刻より戸次父子も自害しけり
爰に八方よりせめ入男女四人壹位法師尼ともいわせて三百余
人切殺して首ども大手の門よりあるいて同十首よりは乃
至を絶て廃稽(折入)りは城を八木系丹後より詰けり初山
根を攻(きそ)し鎌倉より使の時如系より武田(使者)鎌倉
を討んといへども信玄の謀半ばなる故うけ入ず鎌倉よりき
男名命を山根へうけて死を極めく折ること
有(ありし)とぞ鎌倉方も小磐之氏康信玄年久きまて
大勢なり稽てよりあるとて第百(只)たくく
根をとんの(と)あるもの(よ)氏康一人向ふ(きよあらず)
やうぬ故に山根は攻落されくうは成時廃稽城を出て尾鎌倉を
出て今交武田家あるに松山を攻よ左田三系より後詰
せんといへども難儀して出陣せず又山根へも不向ことなくう
くして鎌倉を討ずして帰陣二百人滅絶せを武
士三百(或)ばかりの廃稽山根城城よ小系丹後を
ゝて百人を攻あるとそれより鎌倉城を
氏康も又初のとく上田安系秋を八百人ゝて松山城武田
小系八百人ゝ(ゝ)ゝ其和守佐竹小鎌倉(今交鎌倉の
出てたてよ信玄のりはるを者恐るゝ)ゝ(ゝ)ゝ鎌倉
井ゝて左ゝ信玄の術を鎌倉と怪よ(ゝ)ゝ
されも信玄生れるを大ゝよ(ゝ)ゝ敵中(さゝく)

さんて[illegible]の[illegible]より[illegible]て[illegible]の[illegible]を[illegible]他人の[illegible]
合点[illegible]書き[illegible]より[illegible]今度の[illegible]の[illegible]その術[illegible]
位[illegible]を[illegible]も位[illegible][illegible]
[illegible]て一人の位を[illegible]必死[illegible]て[illegible]を[illegible]は位[illegible]
この術[illegible]は[illegible]て危[illegible]又山[illegible]は小[illegible]
働[illegible]ぬ[illegible]扨又[illegible]百一[illegible]不[illegible]の討
死[illegible]せん[illegible]氏
原一人は[illegible]せ[illegible]と推量せ[illegible]位云は[illegible]
[illegible]は其[illegible]位[illegible]も感[illegible]
宗[illegible][illegible]の[illegible]新[illegible]
[illegible]乱[illegible]富山[illegible]

富山尾張[illegible]
[illegible]年三月[illegible]三好長[illegible]
[illegible]三好元房入[illegible]実休を[illegible]
[illegible]陸[illegible]富山[illegible]根[illegible]
[illegible]三好勢と[illegible]
[illegible]湯川勢も[illegible]
三好[illegible]山城[illegible]原長同下[illegible]
休[illegible]陸[illegible]て実休[illegible]
実休[illegible]城を[illegible]
[illegible]城[illegible]
岸の和田を[illegible]
[illegible]城も富山[illegible]城[illegible]

城ハ長尾方より攻寄る所なれとも長尾方より高山城を原
長方（一さんの害をのがれんため留山より手しるハ如之今也
ゆひつけて一味しのゝていくれん山城なれとも如何ゆひりん
仮盟の法儀をもつて五ヶ寺仍て下野国原氏伯耆国
後七日間宮定原おゝ白て長尾（法ひしりハ同六月廿日紀氏
湯川方根来寺の僧と鞆ふ湯川方同ハ人民飛も
おくゝ掛長（引退く大坂の城（はけ入る留山も高屋城より長
ちしりかくゝくやゆひん堺の津（為ゆゝ此時和泉国
大和山城摂津四ヶ国ハ皆長尾方ヶ屋しゝ掛長三宅城ハ三宅
出雲ヶ寺留山一味ゝ今ハ不叶して廿日の夜ハ三宅を
城を出て流（此時長尾方より畠氏作ゝ来寄（鞆

を元しゝハ所領ヶ方会出て海渡井と談して江南国
の諸氏一人も残ずして一万八千人（井出親吉ちの留守
ハ江の諸氏ヶ方ゝ為ゝ玉しゝ為ゝ為ゝ

井伊出親涙死付島方氏出世之事

今川旗下小堀氏井伊谷城を井伊和尚出親と中ハ兵ん
討死の時戦死しる井伊信濃守出盟ゝ子也和尚ゝ同ゝ
出盟位ゝ為ゝ井伊逆心ありて織田ヶ与ヶ与ヶ氏
共為ゝ理派の紀ゝ川城を攻北条侍中を討ゝ
を出て付ゝ今川の一ヶ新地（ニイ）ゝ為ゝ親規ハ年次井伊と賜き所
ゝ為ゝ井伊谷ヶ逆ゝ氏共ゝ

しかハ左衛門尉より此事を井伊か方へ申つかはしけれハ直親悦んて
誓紙七枚そへの差出し候やうにけせんとて差出しに飯田康能
ハ井伊か討手の先陣られし未定之の為にうけ川へ以行とて召
にて訴あひ右衛門尉か中に居て出て掛川しとハ夏にも志ちて
井伊を井伊ゟ不意の横死之いりてそれ子万千代にあるとき二歳之
しを既に害せらるへきを新野右衛門尉隣りにて不便に思ひて命
ふちけてこひて母子ともに扶持し助りしに永禄七年左衛門
尉〔今乃浜松〕引馬之城飯尾豊前守致実を攻し時新野左衛門尉鉄砲に中
り討死し初息家を絶しに新野か後家并又万千代母子をハ
さるりしに今年四歳にあたる小野但馬守又万千代漸長せは
己か為あしかるへしと思ひて又讒しける渠ハ新野か家人井伊
逸(ハヤ)右か妻子にて知しきもの〔未之〕父直親君にこゝろされ
されハそのあとを忘ふへしなとゝ申によりて新野か後家の方へ
万千代を出まいらしし伺下されけれハ後家悦ひて万千代ハ左衛門
尉か今の御叔父の浄吉坊〔浄土寺の和尚〕に此児を出家にせしめよと
申せしに彼和尚訴出ら脚の為とて彼児を伴ひ出て何方
となくしてこそ万千代を彼寺へひそかにあつけ置
て何も有り是より五年歴て永禄十一年今川没落の時浄
土寺の此和尚并に珠源といふ僧めのとなりて八歳の万千代を
伴ひて三河鳳来寺へ預けり其後とし歴て万千代か母彼
国の松下源太郎か妻となる故万千代も源太郎か家へ来り寄
子となり八年の春秋を送りて万千代十五歳の天正三年の

秋

徳川及ビ其ノ分家（清須）ノ諸侍ノ時ニ彼ノ方ニテ万
千代ヲ出家セシメ其後ハ有テ松下ノ嫡子ノ伝実父ノ子ノ
子ニ成リシハ出家ニ成リ松下ノ嫡子ノ伝実父ノ子ノ
ハ出家ニ成リ其後ハ伊万千代ト云ヒ井伊
谷城ハ浜名ノ城ノ跡ニテ後ノ別（伊井谷ノ三人）元菩
提寺ハ浜名ノ跡ニテ万千代ノ手カラ出ル同
四年武田信玄ノ天神ヲ示ス第ニテ井合ノ時万千代十
六歳ニテ陣ニ立ル毎度ノ手柄ヲ以テ後ハ侍従ト但
ス松平補ニ成リ　徳川家ニテハ家老ノ格井伊直政ト
鬼神ノ様ニ云レシ代々ノ者

佐渡承禎儀去上京有細川義孝江戸下向之事

佐渡承禎ハ子孫ニ使ヲ立テ申ス父実秋死去ノ後
兄義実ハ病身ニ成リ出家ス一向承禎ハ法住ノ今義秀ノ
代ニモ同ジ様ニ成リ天正年好人例ニ有テ浅井ヲ
ノ者ニテ承禎父子ヲ亡サントセ義秀ト云フ人ヲ知人ニ
ヲ有ル様ニ承禎ハ義秀ヲ討ント
ヲ時必承禎ノ家ニ成リ出ル
ハ軍ニ成ル有ル時ハ形ヲ出ス
ヲ和平ヲ調ヘ
承禎父子ヲ殺ス人ハ細川義孝ヲ以テ作ル
人ニテ有リ信長ノ基義秀ノ
ヲ出ス

とて却説文を半て義孝へ渡しける時に義孝も四とけて
和平調ける時は義孝は遠祖決とかるる人へ

佐西実義後向付景俣合戦事

永禄六年六月日佐西方より佐東方へ使を立て申而
実義へ後向一味被組奥を以一味被申しかは
しと之和平は承引せす佐西方の力を
うて実義をとりて侍又難儀をいとけて佐東を打一不絶
とせんとて承引は使者相俣より無て組奥をとき弱
物を無能まてうれは世の噂えもいとこと
義孝徹田のよあらは洗足は佐東へ味方せめ
安西るもしらの佐西守て号承引うれて承引
せんとていとなをかりて佐西は而而
而雲を無へ徹田動而を佐業を入和又九郎は動而
以の大山城を徹田十郎左門佐西を兼て
和との義而の中佐西加勢をいとやせのまを
牧野稲葉小四郎と九郎の十郎左門を
多勝れを紙れを以て卜を佐西刑を殺して留物を
佐入百七左門佐東田格兵衛さも多勝るものまを川を佐西
一をんとるとのへは法勝一同よりて永禄六年六月
三百夜組奥を失陣牧野牛三郎と徹田動而と
野村三十郎と討れて留物三郎入るとて稲葉又左と
野小稲葉は洗田と洗牛ん首を佐西物とて

吳服橋より上げ入りて氏真吳服を奪ひ取り
給ふ天文年中吳服橋より下人海道乃三ヶ所迄出され二十
代お伝の方吳服を流人し尾張よりいかとう
ものとれん沼氏へ行て筆紙墨を調達を乞しかハ調達お
乞せ給ふ所ハ不和ニ成る位ハ乞ひ給ひ

今川家風俗傾廢付奥山所望之被仰渡事

今川氏真ハ愚にして好色多く出て四民を苦迫困窮
ならしめ家臣ハ皆氏真の可ふ叶ふものをんて一家風
ことく見まゝれ部をなれ又の吊合戦もせず大臣ハ遊
死一家士ハ切腹する者多し山の掛を奥山所望之ハ年
来の筋ゆゑ有ゆゑ有りし氏真より出仕人三浦左馬助

義勝と不和ニ成ハ終に遠ざけ氏真ハ出仕あ居所あ居所を
討ふ所ふ所ハ天正元年六月信玄せめ入しハ十餘日ハ
掛中粮ハ出て掛中の者ハ山伝ひして掛を籠りし

氏真与　家康ニ三州軍付氏真ハ徳川家ハ今川ハ拘掛ともせ
吉田の小原紀伊を攻ふ又今川方より参ル佐原八郎ハ
てとゝ成て板倉弾正ハ三浦左馬助義
勝ハ三河ハ長篠城ハ掛をせもる所ハ落せんとせ
その位を拵へて出る　駿河ハ切ハ氏真ハ一万人ハ参
河ハ出て牛久保ハ出張し　徳川の掛掛二ヶ所をせめ
同年一ヶ月ハ　徳川家中ハ百人ハ百人ハ

永原にハ百姓をたてくいんとして三ヶ所人にて出ハ小坂井
の東乃長にて佐藤八郎兵衛と戦ひしに長谷川橋ハ
永原に自分手勢の敵を追ちらし敵を追ちらし
ある年久保ハ手勢氏生ハ戸ヶ谷ハ甲斐浪人武田信虎子息信玄へ
内通し今度長の出馬を伺ひ強盗を奪ひたんとの風説ハ
聞あるに二三度を告る所氏生軍を入れ
永原にハ係と云を和睦今川の先陣と詰合とのことを切て
合戦を始る以時和睦ハ十日出馬にて出馬し叙又
程なく大高城を入て戦ひしの敵をつきふせて智の大勝を
負れと云しに年命尽て他人の力をかりて永功を立
やとて敵陣へ入る所ホ松田七郎兵衛方へ付いて戦ふ
年八歳と云力戦して勝ちよりて新て家し貴を九一言より
知多百姓も立百姓人切て出つ今川一百人の大勝あれとも
ヲとられてくくり去る所七百人氏生ハ敗ハ
ヶ同九月十九日
家康にハ二連木牛久保八幡を攻めんとして吉田へ出陣あり二連
木より三田丹波守牛久保の牧野八郎の板倉を攻一手ハて
吉田へ出陣ふ　徳川勢既ハ攻せんとせしに源新出義義義を
当ふ戦ひ板倉を討れる所戸田も牧野もくりのかを
ちくまくに攻ハ牛久保八郎を攻ぐれしに大勝を取れ
所城ハ城を完て渡しちりさいハ佐藤を責人とて帰りた
城を三角左ヶ所ハ牛久戦ハ敗先て城を明て帰りり

冬之乱一向宗之乱付　家康公家人与一揆事

永禄六年九月之頃を吉良（義昭）と号して苦沢義昭殿ありて西中を横領し之を乱入し之も乱有之よりて上意の内佐崎の一向宗上意を物騒く干渉し苦沢を援数十人（五百）て上意を（使を）そなへ軍用之を取れども命ち中の物を恐信長（織田）殿へ申さんといきてくそくそれあつめそうてく（入）さうり上意ハ冬乱之者の院家の第一番れて計略の西面ち聖寺の中稲ちと拾て尚ハ多後不入の地あるよりかの根藤自今之の様の（如く）佐佐

義を信せとて民衆ありれ行財のるよ手出石人あつまりもに様（キリキ）者ひつさけく苦沢ち家（押ようちるれ乱

義十郎為ち家書あるち命院あてさることも大勝あれ之ちさまよらんかく（）て上意ち（為）苦沢いそきけるを西井雅手物西親と告しハ西親いそうて上意ち（使をそなへ）一意の庵もなく根藤佐佐の法ち（）ハ上意ち上意ち

酒井ち使を数度酒井大（）いうり

家康（）中ちれと雅手物を捜ち上意の計略の者ち佐佐

乱出せて伝て上意ち八中と及ハ中ち中の根藤人（をとくく

兵具根の第一味して一揆（）ち

有ち（ハ一味せんとそふれを）和尚之を用之（）之ちを

搬と仕て長崎幣の者を待ち

の原て有く一向宗ハ之ちく兵と肯て彼之ち（カ）し

六面法を背く衆徒ら手を束ね諸代せようとある由を
聞て時宜を久世三位殿同久世内匠頭殿以下大目の者
四人を新たに八十騎人討捕の西海道へ下向又吉良の一族
より加勢して彼方へ下向ハ四人大橋伊十郎石川源兵衛ホロ
十五人を外に伯七十騎人又肥前へ下向者共ハ吉良義周の
伯父を和泉人たちて吉良又上野へ下向者多し有る所人た
会稽平松の太田吉左衛門外数十人にてあるの所三ヶ所のおのよ
札を立て吉良の軍兵あるよ曽の方へ立せ置る事を聞よ
云く吉良ハ仕合極悪ハ吉良義周の
ものく必死と成て伯父ハ
徳川家人今ハ歌唄ニ付乙松伯田太肥後守家来

さて吉良代官ハ一旦 徳川(略)しう家又一向宗代官
めよりて敵と成る芸州甲斐守も今川を背て 徳川(略)
吉良の軍と戦ふ今度吉良ハ手あらたて敵と成る
を外桜井の松平豊和守義英と譜代の老臣上肥前守酒井
右衛門尉一揆ニ与力ハ酒井左衛門尉忠次ハ
桜井義英ハ針崎肥前守伯父の一向宗ハ
宗門ハ所ハ欲ハ義を忘れ会せられ
外ハ徳川の指図して一向ハ松平伊豆守殿忠次
吉良ハ吉良を法いて今川の伯父ハ長谷川の搬ハ松平
玄蕃法名形原ハ松平紀伊守家中ハ松平主殿助伯父ハ

こうして古屋村佐東谷西の谷筋より谷筋合流して
西尾村八西井雅楽助より出て此地の一揆より長川といふむ
かふ西尾村庄屋孝八古屋村より出て古屋村佐藤と称ふ松平
勘兵衛様領一同庶家も此地一揆より桜井の豊和東沢と戦
云八長瀬南方八古屋村佐藤より三里ハ西を
西南より行こうして此地佐藤桜井三方の敵と三方一里南北
は上地小西井相豊あり三方一里東八長尾西を限り皆敵
あり一揆の初八此地より起りしかとも出羽長瀬より八西沢
を立りしを佐藤桜井を焼て大塚を焼
ホ佐百人牛を分長瀬の住民数百人佐藤此地より行いむ
此中より戸田三郎義八常つまも行こうして出羽義をうけて浪人

郡方ヲ取ル一揆ハ組せしうひそうよ西井四郎方へあやまりを
悔てこうたいこうしうの場中をやきうて長瀬諸をしこうと約
しうらいこうしてもんもんあるうれ郡八所分方八牛をやきて
戸田八近云りて後て戸田ら動乱を免さりて上地郡ら西井高
八一揆の地大塚ありて田文を出ハ れこうこうしうよ先生立
たる元同郡一郡名井四郎左衛門方ハ九助其山中義和助池郡
同三郡郡原七郎左衛門大塚九を左衛門を長尾佐藤郡西井佐左衛門
大郎の松平三郎松同七郎ホ与力して敵と成るされども一度も
長世年中ハ帰方こうしハ西井左衛門西井雅楽助石川伯耆同胃向
ら大久保右郎左衛門息七郎左衛門同治左衛門大久保長四郎同新八同神郎
同八郎左衛門同三郎同名六同五一郎同新兵同与二郎同九八郎助

年八本ある松原ある本ある樫村出雲同所ある同十四鶴反十本
三本桑原孝松平治ある同樫九本同次ある同金助名井又右衛
名井伊賀ある加反九本次本同源兵衛本茶津反荒同小左衛小栗
大六同仁左衛上総三本巴本安左衛ある中根喜兵同九兵同源六
加藤角兵樫原樫原同隼人助同小栗山口清左衛（イ田）佐藤市左衛
香村市七松井九郎中根源左同甚七同新左衛同治次郎同喜兵
天地三本左衛同三郎栗同玄四郎同助栗同清栗同伝左衛同又
治郎当面平十郎出羽面七九郎源兵衛栗加反播磨平栗七助
吉山喜左衛ある人新左衛吉山半助名反馬右衛同
庄助久栄新四郎八田源九郎因幡下総大竹源左郎小栗助
栗同治右衛安反九助泥源助同助栗助栗左衛山平左衛

名井喜源助同半兵衛同半兵衛助同喜七
樫原左郎門反三郎左衛松平山城板浦反次郎同八郎三郎山田長八
加反次郎助郎平長兵衛祖父江左衛源九八郎今村長兵衛細井長
三郎布施源九郎門反郎九郎石川又四郎根来十内宇治宗兵
板浦治七郎同久兵衛板山久内天地源七郎市川新兵衛田井長兵衛木
久保伊兵の松平喜兵源藤の松平立蔵形原の松平紀伊守反
井の松平勘四郎福谷の松平右京地久の松平宗左大絵（フギウ）の松平
源次郎澤根の松平出雲守ホハ皆　徳川方にて面々に長ホハ
ようなる人矢たき長にて反々合戦山村命又上和田の
大久保左郎左衛門の配義を係よ岩ヶ一堂にてこの所陣分
高木左衛上和田上下員をもき滝を佐く式音長守村

東原に出る―我方又額田郡北野の古城尚時其同源右
衛門尉を大将として乙部八郎兵衛夏同を加へ搦手
らへ向ひ源海の松平三郎助政搦手へ向ひ日夜せめれども要害
よくて落ちもせず城中乙部伊豆守より人を遣し
降参して三郎（出）お家を極めて三郎の聟に入て大津は
のがれ夏同と共に三河の中へかれと人
られて既に殺さるを乙部五郎助て命を助けり乙部八三郎助
の手力に付る夏同年暮て後東条に帰り三郎佐原に付る大津
は彼に計略に入り

三月東条城軍付佐藤一揆合戦之事

計略一揆共八方原の上和田を せめあとにて をしよせる大久保八

彼是五千人計東条城（出向て戦ひ
東原も出るありて戦ふ一揆方降参と迎後東条
勇をあらはす公ハ
東原に近れて三人と見てれハ小ケ仏を松平合和近
寄しハ合和をつき出し小ケ仏より東条の軍器
方利をはしハ計略を攻んとて同十月廿七日計略をせむ大久保
と一揆方和田三河一揆に大久保
鉄砲三河あるされども死さるる時計略勢ハ二手より
れて一手に上和田勢をあらい一手ハ大久保川西を東ハ西方
ちうたさんてうちうと謀り降参東と迎ハ大久保方
姉むこ和田と大久保の一を和田（家一入ところさんをいこ

けるを見かせて是へとも事急なれハ不叶只一騎押出る乃
京へ寄上けるところに大久保かゝるを見て必定
敵ハ味方を上和田へ押寄るの間を打切り難処へ追落し
さんとするとみへたり鉄炮ハさまそう縁者なれハ此人をたて
まる事らん敵追とも言ふ必定と下知しける程に一揆本軍
を切んとしけれとも大久保かりあいハ手負ひくと云を引しさり一揆
手をそらしたりけり
家康公の叔父水野藤十郎ハ舎兄下野守と不和にして彼所
地を浪人し参州鷲塚といふ所に引込居られしか藤十郎か
あいむこ水野太郎作村越又十郎と同しく一揆蜂起の刻に
来り敵に軍功をそ立しかりけれは佐崎一揆の後詰として居たる場

小平太石川新九郎同新七矢田作十郎等是太平へたゝかく甚
勢三百人鳥居をせめんと打出ける
家康公敵を追落さんハ口惜とて自ら向りか一揆方か
矢田作十郎毎度先登せる故作十郎を一揆に打まセよと下知
しゆふ
家康公矢田を鉄炮にてうちころしたまふ一揆等終に佐崎へ逃
入りけり同年十二月家りてをきられしに去年正月より若も
さまうけに出ける場小平太石川新七同新九郎大将として
作居大平三ヶ所に打出て放火す
家康公出張しあひに一所もみせきへすして古居のち円へよけ
入しを失肥三去一揆のおる場小平太をうちとれけり

参列大坂城軍 付 利源院合戦事

永禄六年より佐々小豆坂へ
家康ハ物のひ一揆おゝ出合さらいしに一揆ハ
ちゝ流ハ絶ぬ
家康ハ中るされともらかゝ手負ともよる日一揆
の中ゝ元来ハ家人なる石川新十郎大久保六佐衛ハ
浜田源七ハ主人の眼前の恥をやゝひらんとつくとりを
家康ハ詞ゝて彼等をのゝ手ハ討しゝ物しよ所ハ十郎
ハ石川をもひけて石川とつき合しに石川軍やゝ手負を
ゝされゝ物ハ肥ゝ物ハ大久保六佐衛ハ討とる佐衛ハ礼軍に
ゝれゝ浜田ハ

家康自身二ハ槍をつきのひゝ方をくてよけのひゝ
手負ハ家人ともハ皆家免者ハ付
家康ハ浜田ハ彼地のゝを問のひゝよ佐ハいよ佐れゝる者と
ゝ佐ゝ色ゝよて命ハ二ヶ所きゝ所ハ所ハ家よ
ゝ佐ゝ色ゝよて命ハ他人よ佐ゝれゝきゝ色ゝとゝよ
家康ハ弓ゝ色せのひ汝ゝ按のきゝ家ハ家ハ家ハ作
ゝ色ゝとゝや一揆等ハ打ゝ先日大坂城よて石ゝ
徳川殿ハ出合ひゝ手ゝ色ゝ方ハ大久保ゝ上和田を攻ん
ハ家ハ一揆一揆ハ有て手負人上和田ハ家ゝ手ハ手ゝ色
むゝ大久保ゝ眼を討ゝ子息ゝ血を吸ゝ
七郎ゝ八父の手負ゝ手ハ出ゝ戦ゝ

手負けり景勝後詰なさんとして一揆共を催て一揆共さそひ起
立てよけるを自捕へ給ふを心して手痛く引退しけり此時
家康公ハ上和田本軍なりしか使をかひて還元て敵けるか衆門家
まてるひほしめらるその統をもたひ敵もてるよめされて近き
もの八宇給手名郎只七人防ひけり訪たる党人當方門徒三左衛門
同平左衛門植村出羽同庄左衛門米津藤蔵本多平八小栗大六等
三十八騎出俵しけり能白大久保党追つひて討隠へ帯らりと
攻あひて彼ち中をせめ除てよ玉一川身りて底を返ぬかと
為手ありけり此日渡辺源五左衛門
家康公へ向ひ危かりしを渡辺かむこにて竭しけり門太郎左衛門
正政 此時ハ与布 矢をひて源左衛門を討出てす源左衛門か髪八千子半

ら遊るさよりけてある中へ入り土屋長吉ハ是にふりけり宗門在
入ちしけるり係よ云ひ公へしうえへ對して矢をとて防ぎ何分
敵しとて若手へかけそかきし鉄砲上中りて死けり
二十四年とかや
家康公も長死を惜ませひけり土屋か死かハ上和田の城へかき入
けり
家康公も翌日景勝へ海城あり胄甲をぬかせ給ひしに鉄砲の
玉二つよりひのけより出けり御運強き事と申けり一揆方ハ
久世平四郎を先として十余人よき侍とられ景勝方にて惣度
十郎三郎松平源左衛門土屋長吉以下五人討死其外人保津
九八郎書山虎之助ハ佐崎へ行てちをやきさんとて夜中ひ

そうよ思ひ入て上方面ゟ一そく取登りて夫人を又有て殺害
し夫人ゟ首を堀中へ投棄出て
家康へ御注進しられ景勝海ゟ引揚
武田信虎入道逃去駿河へ到る抑川窪源五郎信孝
かゝる時義今川ゟ せあるハ 徳川家へ
さゝりこゝよ武田信虎むかんとする雑説ハ
家康への謀ありしとやさるも是より氏真ハ信虎上洛を
至る信虎駿府へ居こゝを抑川堀ゟ所ゝら家臣
とゝ偽家ゟ 帰ハ
一人甲府へ也 出 ゟ家ゟ家へ入て 信玄ゟの使者ゟ
使者ハ信虎氏真と不仕 ゟ家

有て 上洛 ひそゝよ信玄へ申 ある 身を
仕ゟ二人あき士 人 使者 て 人 ゟ
信玄 日 源義 を 同 七日 源義 家臣
へ ゟ 日 大和 一族 源義 と 者 武田 の
時 義 年 大和 扶持 年 ゟ 信玄
信玄 ハ 信虎 て 信玄 あ
上ハ ゟ へ 信虎 て 信玄 ゟ
信玄 出 ぬ 駿河 ゟ 義元 の 礼
ハ 家 も 義元 義元 ハ
虎 祖父 ハ 信 ゟ 家臣

永正十五年より今永禄六年迄六十六年流人にて今既に七十
歳に成れり我駿河へ引越せり建久元年頼
朝公武田太郎信光に命じ信濃と名のらせ給る二十歳を祝け今年
六十歳に成て男子をもうけ信玄と名付あやうく
して信濃に代と付て今年十歳也たのもしき器のひとの弟
のときに信虎弟に義元の情よって信濃をたこうしてらし
なる今氏真に中遠ひてかく御恩に成るを又氏真に
謀反を三浦左馬義次と云奸人上総介を誘て氏真に逆
心仍て氏真は をもうけ来たりて信玄より
てよかるべきを学んとすれども思ひて京へ上て菊亭殿を頼
饗応を一しに上総介の時今年十九歳に義元を生乃
中に菊亭殿へ参り信虎に思こがれ上洛せんと思ひ上総の
父子に信玄に西き申聞かれ不便に思ひ給へと信玄へ申
し扱又ひそかに三郎に氏真信玄に近寄きれ給へ久しきるる
ねと今に根ぶんかの今信玄の武器信虎海を渡されに今川
家十年を過ぎて十七歳に成れば上方流人(常盤殿と云
ものの子也)の方に義元生世の時江戸信濃の信人小笠
原と云ふものと義元に成あるその湯にて出合彼方の
上方色の女を妻て左家を守面白く義元かれを左抱
んといしに小笠原に年数十歳に成ば是一人に八
程なりといふより天文八年二月上旬参河ちうの小笠原に
いしを殺して左仕ひしに天文十一年小豆坂の合戦に徳田

弟人武蔵地三位と云一大剛の者と白助組討して三位の首を
とり施主をへて言名を義元取ひきたりて三の者と云
ふ所を義元の家の源人義家義隆同賀茂三
郎義清の文吉を以て佐竹の家の白助死しかれとも門葉
崇拝なる義光西野某ホ左ヶ人白助死しかれとも門葉
又ととゝめ為をたく又山京も新宮なれとも義元の
秘蔵なりき少智利根の者なり氏長も為よ入二人と為き
功者之拝かう二男よ崇源第九郎と云者なりい元為京の
者にて武蔵助義と云所人の三男也第量にくれ安者なり
拝かうをよ嫡一もう下戒の子と称して義元(出)ケ渠利
徳の動を法く等の名人物ハ義元相伝として動定法と仕
り義元ふられて氏長又かきを電一三浦源第左ヶ者子と反
組名実名改て三浦左ヶ佐義次と名のる也崇法と少会
門義助ハ左ヶ家四年源佐山田京攻の時今川より加勢として
計少会十八年にて向一又源佐松山城より河越城出陣の時氏
小ヶ門義助加勢ふりて法名ある御有氏長が威状
を一ハ今川従ひ十八人所とあり此武蔵の者なれとも起
無ふまきて大欲安遠の三浦左ヶ佐と中よく氏長の出所左よ
起山酒宴をすとせり左ヶ所を為れて盆のをとりも五月十二
月をもはゝ〻む蹴鞠義陽猫演よ猫系を月の令乳年よ
ふ〻せりされて皆武をヨキれて義元のうゝひ合戦ふゝひ
も出きまき歩行ふ沼武一名よ所し名佐宗宗左人を流して響長
させふり又義元の高よ義長ふ為ふて英女ふり四名右ヶ姉ふり

三角いろくとあしらひて今はたゝ手ぶりの書とせり其
不義いかなることゝ命ぜし事を信虎ゆゑ氏康ゆゑせん
とやうひとん氏を氏康いろくゝ深く氏をたのまさせつゝ又
名古屋右衛門といふ好人某うるを武田家薬入れと云しより
源八今川家にて皆氏康名をかりて事をいふて彼くゝ氏康ゆゑ
第にて父をうゝれ今年ゆゑ家にて信玄向ふ仁有徳川八
信玄一味しあつて流浪の命源源家康と酒井左衛門姫
故風といふ小女を賜て入室今川家をたゞやうやう強をゆ
八徳川とゝ一緒氏康ゆゑ三浦と中あしき者
を家来兼てよくとめ合せ面ゝ味方よあく加勢一信
頼八二信三信ゝ人よりて源東しあつ見よ面相ゆゑ

とて源義経・頼朝しゆとハ人よそれ人ゆゑハ信玄のゆゑ方
とよくゝやせとあり源義経ゆゑ頼朝の大ゆゑ汗よて信玄
出撤とゝ家ゝ流授とのゆゑ人しゝいふ信虎ゆゑ出ひて半ゝ
ものハ義ゝあるゝ云あゝとして自筆よ市紙せゝれゝゝ
河よいゝく

月向人道中合記上ゝ流ゝ会録心可被ゆゑ者也

とゝ手て刺紙して源ゝる月向人ゝ話ゝ海家同月十九日よハ信虎ハ
家ゝを出て京人流の人ハ源義経ハ水日舟川を立て源義川出陸
しゝ水ゝ宿よ甲府人ゝ行くとゝ人ハ信玄河家く信虎老老
しゝひいとをゝきるよゝ半いて撤よ恐ゝしきゝ下ゝゝ
月人ゝ信ハゝゝゝよゝひしゝゝゝゝゝ

信玄書状上州箕輪衆小幡主計殿宛天正十年

上野国七郡信濃ゟ紫西ハ左京亮殿ハ信濃の内ゟ又一説ニハ上
野の内上野ハ左京亮のほとりにて上杉系四郎一門ひろくして武蔵の
ねこ稲田殿年一厩橋あり小幡もむこ上ハ長橋名胡桃の山の尾崎
を搬よきつきて箕輪と名付て信しゆう武田小泉ゑくしく城れ
も唯伏せて同国箕輪ハむこ小幡尾崎ゟ三ヶ所踏よて
ゆ所ゟ三ヶ所ゟ和むこ小幡ハ西ゟ云者尾崎ゟ長野ゟ後
ゟ長野も尾崎ゟ信ゟ箕輪ゟ三年有尾崎ゟ湯浅の留守ゟ
箕搬をせあ九ゟ三ヶ所ゟ近敵ハ西ゟ彼搬へ入ゟ所ゟ三ヶ所ハ力
あく書ゟをたれて甲府へ行信玄ゟ書むこ上ハ武田ハ上長
をんゟけ一ハ上ゟ先ゟ上ゟ信濃ゟ向ゟ上ゟ

是をなゟ(同九月信玄の堺南(ナシモリ)ゟ上ゟ上ゟ尾崎ゟを
入ゟ上ゟ今年永禄六年二月十二日上野をせめんとて一万三
ゟ人出陣南目(ゟ)ゟ尾崎ゟ上ゟ小幡ハ西ゟ云ゟ氣ハ
ゟ尾崎ゟ中ゟ西ハ器量も力も人ゟ上ゟ上ゟ
ゟく者ゟ上ゟ信玄ゟ(四)家所ゟ上ゟ小幡ゟ一疋
ゟ板打二ヶ所付ゟ上ゟ近の人ゟ上ゟ一本ゟ
旗ゟ上ゟ竿の先ゟ上ゟ小幡ゟ火ゟ上ハ汝ゟ
小幡ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ
近ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ
搬ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ
箕搬へ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ上ゟ

[illegible]中納言を召し進ぜらるる事
[illegible]を武田勢追討して[illegible]を[illegible]
[illegible]るされば信長より[illegible]小幡信貞仕へ清代のごとく
せしかば永禄十一年より上洛のとき[illegible]ある時門葉[illegible]京
集へを使よて小幡を召寄せ信玄[illegible]の書に[illegible]
姫[illegible]離ぶせよとしのの[illegible]時より小幡[illegible]は氏女[illegible]姫[illegible]
父[illegible]家より[illegible]を[illegible]るるべく[illegible]七年[illegible]
[illegible]ともあるべきよう[illegible]如[illegible]
[illegible]して甲府[illegible]今身[illegible]
[illegible]山[illegible]海源の光義の妹い寡[illegible]
[illegible]家[illegible]

[illegible]あり[illegible]や[illegible]
[illegible]の書に[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]信玄[illegible]
[illegible]年十月[illegible]
[illegible]を亡し[illegible]
[illegible]信玄は[illegible]
二月廿六日[illegible]
[illegible]

このゝ安中郷（八耳利小橋原宮原宿祇門原）の生肥業盛
の筆橋郷（八門原山猫小山田馬場向）の一家より三郷（ゝせゝけせ
めゝゝより安中ゝを八塚原郷郷をゝゝて松枝の安中領の塚ゝ
ゝせきしゝゝ見も降原ゝ中ゝ山井海松枝（入谷ゝさゝれゝも領の八
人を大磐ゝゝゝゝとて領分を八諸しゝ高安中ゝを助命
して安中の郷を与（ゝ知行を領しゝゝゝゝ耳利ゝゝもゝむゝよ
はゝゝゝゝ筆橋郷もゝゝ所きしゝゝゝゝも者の二百人命ゝを叶
ゝゝく山猫ゝ被皮屋敷三科大熊命ゝよゝく戦ひ以附大熊主義
八領命ゝより命ゝて瑞ゝ三十瑞見庭七十女人（新命ゝゝゝ
以軍主猪熊十八郎ゝて生肥ゝ家見ゝ見原弁当屋ゝ組む東賀美
ゝゝ命ゝ命せて皮弁を押（て猪熊ゝゝゝ猪熊を
いさめゝゝ見猪熊の領ゝて失ゝゝゝ（ゝを知て（ゝ郷ゝゝゝ所
ゝも熊ゝ弁ゝ命て郷を大原十九郎宗熊の力戦して撃（
入て切腹ゝ命ゝも自害して郷八色義ゝゝゝ永禄二年か
信玄ゝ郷ゝんをゝけて今年永禄六年義郷ゝゝ業盛ゝ
書あゝゝゝゝ二郎の男子も孫戦ゝゝゝ書女の十七郎ゝ
郷ゝもこゝゝゝゝゝゝ業盛ゝ書八ゝゝゝゝ安女
命ゝを信玄高ゝせんとい（ゝも貞女をゝゝけゝゝ命ゝ
ゝゝゝゝ沈ゝゝゝ度生肥ゝ信玄命の若二百人（甲州（
石ゝ（門原所紀ゝ新く門原ゝ附ゝく僅ゝ中瑞を新ゝゝゝ附
ゝ二百中瑞ゝ命ゝ命の若ゝゝゝ八三百人瑞の大将ゝ領ゝ
筆橋ゝ居住して西上野七郎のゝを支配ゝゝゝゝ代稲新

奈良二十瑞白金左手ニ中瑞金黒紫浅黒三
十七瑞五色紅黒千瑞淡千七つ大六八帝和国之象七沢右ニ元ホ
ヒトク見伝ヘ聞ー上板ニ八絵ヲ以テ

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan